

小鷹狩元凱と薄田太郎への注目と再評価

——失われた広島へのアプローチを通じた
現代広島における郷土教育への一提言——

中 道 豪 一

(受付 2017年10月31日)

はじめに

本稿は小鷹狩元凱と薄田太郎の業績に注目し評価を与えることを目的とした。なぜ小鷹狩・薄田への注目と評価が必要かという点、原子爆弾で失われた旧広島市（以下「広島」と表記する際は、旧広島市エリアを指すこととする）の生活や文化の記憶を伝える業績を残しているにも関わらず、周知されていない状況があるからである。

広島は昭和20年8月6日の原子爆弾投下により、約10数万もの人命を失った来歴を持つ都市である。爆炎は人命のみならず、広島城と共に栄えた町並みも文化も一瞬のうちに消し去ってしまった。その後、広島は復興をとげ、平成29年現在、中国地方最大の都市として発展を遂げたが、原爆で失われた広島的生活や文化の記憶は復興どころか、歴史の中に消え去ろうとしている観が否めない。

正岡子規の詠んだ柳の多き広島の姿は失われ、平和記念公園に存在した誓願寺境内の厳島大明神が旧暦6月17日管絃祭の日によくの人で賑わったこと、2月の初午の日、広島城三の丸にあった稲荷神社の祭礼に多くの人が集まった記憶などが、現在の広島において語られることは極めて稀である。また人口に膾炙された「がんす」という方言や「同じ三分なら海田から」といった俚諺等も含めると、その例は枚挙に暇がない。

なぜそうした生活や文化についての記憶が失われたか？そうした記憶をどう活用していけばよいか？広島という場所における郷土教育の姿は現在のままでよいか？といった分析・提言が今後注力すべき課題と展望だが、本稿は上に示した現状を鑑み小鷹狩・薄田の残した広島的生活や文化の記憶を提示することに注力した。なお考察の範囲が広範になることから、事例は年中行事・祭祀祭礼関係のものを優先的に扱った。

1 原爆で失われたもの

明治28年、日清戦争の従軍記者として広島を訪れた俳人がいる。日本の近代文学に大きな

影響を与えた正岡子規である。子規は巖島神社（広島県廿日市市：以下、神社の表記を「巖島」ではなく「巖島」に統一する）・饒津神社（広島市東区）・段原（広島市南区）・東練兵場（広島市東区：現在のJR広島駅北口付近）・広島城（広島市中区）等を巡り、歌を詠んでいるが、その中でも認知度の高いものが比治山公園（広島市南区）富士見展望台の句碑に刻まれた「鶯の口のさきなり三萬戸」である。これは比治山から穏やかな広島市内を眺め詠んだ歌といわれているが、ここで挙げたいのは、別の場所で詠んだといわれる一句「広島は 柳の多き ところかな」¹⁾である。

原爆投下前の広島における生活史を記録した薄田太郎は、柳を広島人の気質を表現した木と指摘した。人ざわりがよく、芯が強いという柳の性質に、原爆の被害に負けなかった広島人の気質を重ね合わせているわけだが、これはかつての広島に柳が多く存在した事実に基づく表現であることに注意を払わねばならない。薄田の言葉を借りると柳は「なごやかな広島のシンボル」²⁾であり、子規もそうした町の様子を詠みこんだと考えられる。同じく子規が市内の土手町で詠んだという「上下に道二つある柳かな」³⁾も、そうした情景に基づくものであろうが、現在の広島において、町の様子や人の気質を語る際、柳を素材にした表現を耳にする機会があるかという点、殆ど聞くことができないというのが現状である。

現代の広島において国内外の注目を集めるのは原爆ドームと平和記念公園である。平成28年、Barack Hussein Obama IIが広島を訪問し「核なき世界」を訴えたが、これより後も広島という都市が「被爆の記憶を伝える都市」の意味づけを持ち続けることは間違いあるまい。しかし原爆投下より70年が経過し広島人が如何に広島の歴史を築いていくか？という観点に立った際、もしくは広島という都市の実像を見つめた時、そこには失われた過去を省みる姿勢が弱いと言わざるを得ない状況が展開されているのではなからうか。

例えば現在の平和祈念公園だが、平和大通り（100 m 道路）に面した広場に誓願寺という寺院があったこと、そして境内には大きな広場があり、その広場の池のほりには巖島大明神の社があり、旧暦6月17日に管絃祭が行われ多くの人々がつめかけた記憶をどれだけの人が受け継いでいるのだろうか。また平和大通り（100 m 道路）が多数の小道が通う生活空間であったことを誰が語り継いでいるのであろうか。無論、過去のことを細大漏らさず後世に伝えることは不可能だが、その都市で大切にされていたものが伝えられていないというのは、いささか不思議な感覚を覚えざるを得ない。

また失われたものを認識する一例として、言葉に注目するのも適当であろう。例えば原爆投下前の広島では「がんす」という言葉が用いられていた。これは今日広島弁として認識されている「～じゃ」と同じ使い方をされており「～でがんす」という言葉が日常生活で交わされていた。この「がんす」についてはRCC中国放送の放映する元就という番組で、進行役の芸能人が用いていることから、認知度の高い言葉となっているが、広島の女性が使っ

ていた「ありきしょっよ」（自分はどうしようか）という言葉に至っては、耳にする機会はほとんど無い。

さらに江戸時代、宮島に参詣しようとした農民が、広島に東に位置する海田市から船に乗ることを我慢し、広島から船に乗ったところ、賃金が変わらないことを聞き海田市に引き返したという「同じ三分なら海田から」という話⁴⁾や、自分はお金を負担していないにも関わらず、あたかも自分が出したかのようにふるまうことを指した「人の牛蒡で法事」⁵⁾、江戸時代の広島における立身出世における俚諺「一ひき、二たか、三かしこ」⁶⁾など、広島で生まれ育った者であっても、初めて耳にするものが少なくないと思われる。

また、近世の広島城下を研究する者にとって、城下に豚が放し飼いにされていたことは周知の事実であろう。既に江戸時代に消えてしまった風景である為、原爆で焼失してしまった風景とは質の異なるものだが、こうした事例からも、現代の広島が、かつての生活や文化を中心とする都市の記憶に対しあまりに距離を置きすぎる状況を認識できるのではなからうか。以下、小鷹狩・薄田の業績を繙き、かつての広島の姿を素描することを通し、現代広島との距離を認識することで郷土教育への提言を行いたい。

2 小鷹狩元凱について

小鷹狩元凱は弘化3年（1846）3月8日、安芸国広島城下白鳥九軒町に広島藩士 山下平八郎の五男として生まれた。一度他家の養子となるも諸般の事情から山下家に戻り、その後小鷹狩家へ養子に入ったことから小鷹狩の姓を名乗る事となったが、その人物は博覧強記の語を持って人々に記憶された⁷⁾。一度聞いたことを決して忘れることがなく、7歳にして芸備藩士の官名と俸禄を記録した帳面を記憶し、後に陸軍省に勤務した際も『日備提要』を記憶して職務に当たったといい、この記憶力が広島のことを記した著述につながったと考えられている。

小鷹狩には『芸藩三十三年録』『広島蒙求』『広島蒙求次編』『芸藩学問所記事一片』『芸備協会略志』『弘洲雨屋虫干集』『弘洲雨屋虫干集外篇』『広島雑多集』『自慢白鳥年中行事』『梅月遺影』といった著作が知られているが、これらは小鷹狩元凱伝記編纂会編『元凱十著』（弘洲雨屋、昭和5）としてまとめられ、現在も目にすることが出来る。中でも『広島雑多集』（大正9稿了）、『自慢白鳥年中行事』（明治44稿了）は民間の生活や文化が記録されており興味深いものとなっている。また広島藩最後の藩主となった浅野長勳の事績をまとめた『坤山公八十八年事蹟』（林保登、昭和7）は小鷹狩の働きによるものである。

しかし小鷹狩はいわゆる学術研究に専念した来歴をもつ人物ではない。広島で植田兼山・平木順次郎・石井翼山・関留之介に学び、後に広島藩校学問所（現修道中学校・修道高等学

校)の梅園介庵・山田十竹に学んだのち、学問所で教育に携わったものの、この後は新聞局、陸軍、政治活動と活躍の分野を変えていく。政治活動から身を退いた後は、藝備協会という広島出身の若者を支援する組織の運営に力を注ぎ、多くの人々からそのような業績をもって認識されるに至るわけだが、小鷹狩の著作はそうした活動の最中に著されたものである。

小鷹狩の人物を窺うには小鷹狩丙吉『小鷹狩元凱翁』（京屋印刷所、昭和13）が適当である。これは昭和9年（1934年）1月18日に病没した小鷹狩を偲び編纂された伝記で、関係者による座談会の速記録や小鷹狩を回顧したもの等で構成されており、人物関係や業績を考察するにあたり貴重なものとなっている。

広島出身で日本統計学黎明期を支え、この『小鷹狩元凱翁』の編纂委員長を務めた横山雅男によると、小鷹狩の亡くなった翌2月、令嗣小鷹狩丙吉が葬儀関係者を交えて設けた会食の場で、伝記編纂の話が出たという⁸⁾。その後、伝記編纂の話は直ちに進行することとなり、横山雅男をはじめ村田俊彦、村井二郎吉、高羽富士夫、玉國富士夫、手島益雄を編纂委員とした小鷹狩元凱伝記編纂会が財団法人藝備協会に設置された。そして井上角五郎以下87名を発起人とし広く伝記資料の蒐集に努め完成したのが『小鷹狩元凱翁』である。

『元凱十著』『坤山公八十八年事蹟』に代表される小鷹狩の業績の他、先述した多様な活躍の一端を、横山の言で表現するならば「広島における育英事業の功績」「広島立憲改進黨における活躍」「宇品築港後に発生した問題への対処」「佐藤正将軍の銅像建設」等⁹⁾になるわけだが、それらを理解する際、小鷹狩という人物に一貫して存在する徹底した郷土愛を指摘しなければならない。特に、明治維新政府に広島から人物が多く出なかったことへの憤り、広島が中央から取り残されることがないようにとの強い信念は強烈なものがあつた。

例えば「広島における育英事業の功績」の最たるものが財団法人藝備協会だが、これは広島県の若者が東京に出た際、経済的援助をはじめとする様々な支援を行うために設立された組織である。この組織は明治12～13年頃に蔓延した藩閥人の偏重への思いから、明治14年に設立された興芸社（後に興芸東社）を前身とするが、その設立に関わった1人が小鷹狩である。第1回給費生には下瀬火薬を発明した下瀬雅允が名を連ね、以後も多くの若者への支援を続け、明治30年、組織拡張を経て藝備協会に改称している¹⁰⁾。

小鷹狩は財団法人となった明治36年から大正9年までを専務理事、大正9年から10年までは理事長として藝備協会の運営に携わり、大正10年から昭和9年に亡くなるまでは名誉理事を務めているが、こうした職務にとどまらず、自宅に学生を寄宿させるなど、広島出身の若者を育てようとする意識は揺るがぬものがあつた。明治26年1月、本郷湯島の麟祥院に設置された修道館への寄与も同様であるし、『小鷹狩元凱翁』に寄せられた一文に「学生の世話をする人」といった表現が多々確認できるのもそうした意識に対する評価といえる。

よって郷土広島への中傷に毅然とした対応を取ったことも、徹底した郷土愛の延長線上に

あると考えられる。大正6年頃、広島第11連隊に所属する軍人が、広島人の欠点を挙げて講演した際、それがいわれのない中傷であると激しく抗議したこと¹¹⁾、日清戦争の頃、報知新聞の記者が広島の記事を非常に悪く書いた際、関係者を代表して小鷹狩の名で反論を掲載したことは顕著な例である¹²⁾。

小鷹狩の業績は横山が挙げるように、様々な領域に広がっているものの、本項ではその概略にふれると共に、基盤となる郷土愛を確認し、その人物像の一端と『元凱十著』に収録される諸著述の背景を確認した。

3 小鷹狩元凱の記述——七夕・正月の年中行事について——

小鷹狩の著作には広島で失われたものが多々記録されているが、その一例として『広島雑多集』にある七夕の例を挙げる。小鷹狩によると旧藩時代、端午と七夕の節句、そして中元と八朔の祝日に12～13歳の女兒を筆頭とした集団が晴衣を着飾り、歌を歌いながら道を歩く「女兒の踊り子」という習俗があったという¹³⁾。小鷹狩はその習俗で歌われた歌詞や所作を記録しているが、そのうちの一つが「ネーン（年）に1度の一、七夕様へー、ナーニを御馳走にアゲマーショカ、アゲマーショカ。硯キヨメて一、五色の紙へー、オーモヒ思ヒの歌を一カク、歌を一カク。ウータの出ドコラー（所）、横町二丁メー、ツークテナガスは細クーマチ、細工ウ町」である¹⁴⁾。細工町とは現在の大手町1丁目、すなわち原爆ドームがある付近の旧町名である。現在の広島市内においても七夕の行事は行われているが、こうした「女兒の踊り子」の姿を見ることができない。

また小鷹狩はこの「女兒の踊り子」に関連させて、文化文政の頃まで、屋敷町において町家の一団を邸内の庭へ招き入れていたこと（「町の踊り子」）を記している。「其家に恰當の令娘あらば之を先頭とし輪を作り、先づ一齊に太鼓二聲を撃ち」¹⁵⁾との記述から、招き入れられ一団は、その家に年頃の女兒がいたならば、その子を囲み太鼓を打ち鳴らしていたことが分かる。その時の音頭が以下の通りである。「トントン コトシヤ於雪様（或は家の令娘の名を呼ぶ）の御色がシーロイ、コトシヤ於雪様のオイローがシーロイ、内で神妙に針シーゴト。ウチで神妙に針仕事セースが、内でシンベウに針仕事セースが、アレは自體カーラウマレーツキ。ウマレツキかやオ顔にエークボ、生レツキかや御カホーにエークボ、目元口モートシホラーシヤ トントン」そして女兒がいない場合、または幼すぎて踊れない場合は、町の踊り子が「トントン 於雪様デヤラニヤ名代ダーシヤレ、オユキサマ出ヤラニヤ名代イダーシヤレ」と名代を出すように告げ、その家に仕えている女性が「コレが於雪様の御ミヤウ代」と歌いながら先頭に立ったという。小鷹狩は「頗る優美の遊びなりき」¹⁶⁾と回顧するが、ずいぶんと賑々しい風景が想起される。

こうした年中行事を眺めると、正月における武家の式事なども、失われた生活や文化を実感するに適した事例といえよう。小鷹狩によると武家の元日は、早朝の「萬歳」より幕を開けるといふ¹⁷⁾。6～7人の男子が提灯を提げて内玄関に入り、1名が扇子を翳し目出度い言葉を唱えつつ舞い始めると、その他の人が「萬歳や萬歳」と舞に合わせる。そして「萬歳樂に萬歳ら」と舞を納めたところで、家の者は大きな盆に白米を盛り、その上に紅白の重ね餅を載せ6～7人の男子に与えるのである。

しかし元日の早朝はそれで終わらない。続いてそれに続く4～5人の婦女が四ツ竹を両手で撃ち、「目でーたいーな、目出たいーな、ソウレソウレ、お家を繁昌と祝ひーます」など面白い節を歌うので、その人々にも小餅などを与えたことが記されている。

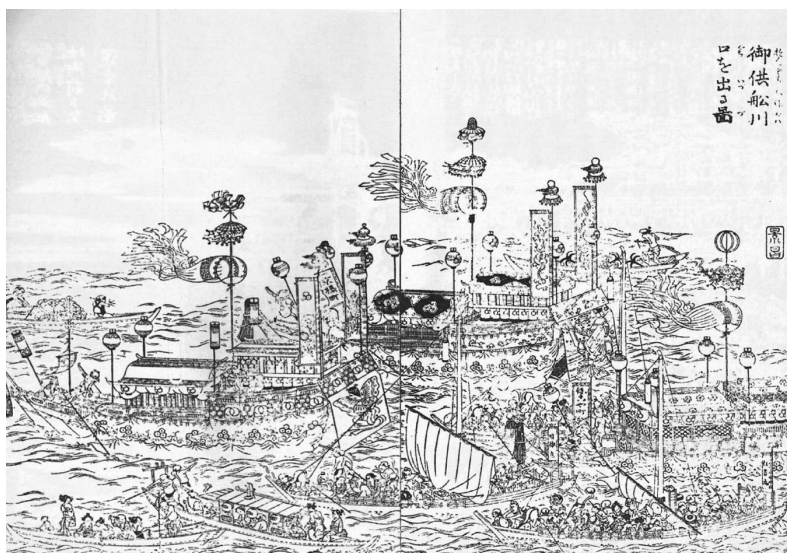
この人々が帰る頃、ようやく日が東に昇り、家中での正月が始まる。雑煮餅の用意が出来たら、一の座敷に全員座り祝辞を述べ、本膳を前に年少者から屠蘇酒を飲み始め、順次年長者に渡していく。そして最年長者に至った時、また屠蘇酒を注ぎ年少者へ渡し、その後一同で雑煮を食べるといふ一連の所作が「年首第一の家儀」といふ。そして主人は午前6時頃までに登城し、藩主に年頭の拝賀を行うことが記されている。

これに続き2日には午前4時頃、漁商が「御俵を納めます」と声を張り上げて訪問してくる。これは今年の縁起を祝うために、漁商が多数の海鼠を贈るもので、対応する家々は事前に用意していた紅白重ねの座り餅を贈り祝辞を交換する。海鼠を贈る理由については、その昔、武家では俵を得ることが目出度いとされていたことから、漁商がそれになぞらえたのではないかと小鷹狩は指摘している。そしてこの日から、様々な行商が武家邸宅の門前を行きかうようになり、「お手遊び愛嬌ものはよ」との玩具を売り歩く声に子供たちが喜んだことも記されている。

この他、広島で来客の為に炊事場が混雑することを「甲斐さんの臺所」¹⁸⁾ということ、眠ることを「可部に往く」¹⁹⁾ということ等、現在の広島では失われた生活の風景、耳にすることのできない逸話を多々伝えている。本稿冒頭で、「広島市の生活や文化の記憶は復興どころか、歴史の中に消え去ろうとしている観が否めない」と指摘したが、小鷹狩の記録を読み解く限り、その表現は妥当であると考えられる。

4 小鷹狩元凱の記述Ⅱ——御供船・九軒町磧の火振りについて——

平成8年、世界遺産に登録された厳島神社（広島県廿日市市）には旧暦6月17日に行われる管絃祭という祭礼がある。これは管絃船に御祭神の鎮まる御鳳輩を乗せ、対岸に鎮座する地御前神社への渡御を中心とする祭礼だが、この日に合わせ広島各地で様々な祭礼が行われていた。例えば天保13年に刊行された『藝州厳島図絵』にある「御供船川口を出る図」「紫雲



御供船川口を出る図

『日本名所圖會全集 藝州嚴島図絵 上巻』(名著普及会, 昭和50) P428~429

山誓願寺の管絃」はその姿を克明に現代へ伝える一証左である。しかしこの認識は研究者や郷土史に造詣の深い者に限ったものといえ、現代広島における一般的な認識とは言い難い。小鷹狩による記録が、広島市域全体を対象としたものではない点、さらには江戸時代の事例であり、現代と時間が隔っている点も勘案する必要はあるが、当時の状況を記録している点が貴重であることに間違いはない。以上の点を踏まえ、小鷹狩元凱『自慢白島年中行事』の記載を確認したい。

小鷹狩によると、この本は明治44年の夏、生まれ故郷である白島の年中行事を記録しようと思いつき著したという²⁰⁾。当初、その原稿を公開するつもりはなかったというが、人の知る所となり『藝備之友』に掲載されたところ好評を博し書籍化されることになった。その記述は嘉永・慶應年間の実況であり、明治以降の変遷・廃絶は記載していないとの記述から、江戸時代、それも幕末における広島の記録と認識することができる。

この『自慢白島年中行事』における管絃祭関係の記述が白島の「御供船」である²¹⁾。広島城下では管絃祭の行われる旧暦6月17日の前日になると、「明日は嚴島お管絃船の大祭」ということで、町々の賑わいが度合いを増していたという。その賑わいを象徴する存在の一つが御供船である。なおこの表記から「おともぶね」と読むのが一般的だが、広島では「おともんぶね」「おとほんぶね」などと呼びならわしていたことに注意しておきたい。

小鷹狩はこの書物において6月16日の黄昏、御供船が我先にと最寄りの河口から嚴島に向かう様、それを観覧する人々の盛況ぶりと共に、生まれ故郷たる白島町が祭礼に参加するさ

まを書き起こしている。その記述によると東西の白鳥町は、年々この祭礼に参加しており、御供船は中央で栄えている町々にも負けないものであるという。特に西白鳥町の船首には他には見ることの出来ない人勝の三番叟が飾り付けられていたそうで、小鷹狩が誇りに思う根拠の一つはそこにあったと考えられる。そして「アイヤアホウ」の掛け声が記憶に焼きついているとの記述から、往時の賑わいの一端を想起することができよう。

なお平成29年現在、白鳥を含めた広島において小鷹狩の記述にあるような賑わいを確認することはできない。『藝州嚴島図絵』に描かれた多くの人で賑わう誓願寺の嚴島大明神は原爆で焼失し、現在は平和祈念公園となってしまった。また橋本町の川土手、かつての明神浜と呼ばれた場所に鎮座する嚴島神社では、昭和10年代まで御供船が出され廿日市市の嚴島神社と同じ玉取祭も行われるほどの賑わいを見せていたが、現在、そうした規模の祭礼や行事は失われている²²⁾。それを考えた際、小鷹狩の記録はたいへん貴重といえる。

さて、嚴島神社の管絃祭にまつわる話は御供船だけではない。『自慢白鳥年中行事』の「九軒町磧の火振り」もまた注目する必要がある事例である。まず九軒町とは現在の白鳥九軒町のこと、磧とは河原のことであるから、九軒町磧の火振りとは白鳥と牛田の間を流れる京橋川の河原で行われる火振りという意味になる。火振りとは字の通り、火を手を持ち振ることだが、なぜ河原で火を振るかという点、嚴島神社の管絃祭を遥かに敬するためだという²³⁾。日暮れになると「蓬萊三宝清め給へ」を大きな声を張り上げながら、手に持った松明を振り河原を「幾百千の壮幼男子」²⁴⁾が縦横自在に闊歩するさまが記録されている。

また九軒町磧の火振りと時を同じくして、市街地では家々が提灯をつるし敬虔の意を表すことが記されている²⁵⁾。毎年旧暦6月17日に行われる嚴島神社の管絃祭にあわせ、材木町の誓願寺内にある嚴島大明神、京橋川の嚴島神社でも祭礼が行われるが、それに合わせ奉祝の儀礼として灯火を用いた行事がなされたことは広島の特徴として記憶してよい。小鷹狩はその様子を以下の様に表現する。「抑も同社の神霊は、全藩の尊崇弥高く、此宵は行処として、二丈三丈乃至は四五丈を維き合せの竹竿か、或は幾多の丸太をもて、天をも衝ん高標を作り、其最高所には挑灯を釣るし、市街は戸毎に神燈を揚げ、人々孰れお敬虔の意を以て表せざる者はなく」²⁶⁾とあるが、ここから広島町には挑灯（提灯）、それもかなりの高さのある提灯がつるされていたことがわかる。ちなみに1丈は約3メートルであるから、2丈で6メートル、最高の5丈では15メートルということになる。驚くべき光景といえよう。

さらに小鷹狩はこの記録に伴い、この夜、広島各川々に満ちてくる汐を汲み取り、家の間ごとに撒くことで清めたり、その汐を飲むことで明神様の加護を祈る風習のあったことを記している。これもまた現在の広島においては、決して一般的とはいえない風景である。

5 薄田太郎について

小鷹狩の生まれた弘化3年（1846）から遅れる事56年・明治35年（1902），本稿で取り上げる第2の人物，薄田太郎が生まれる。弘化・嘉永・安政・万延・文久・元治・慶應・明治・大正・昭和を生き，江戸期の記録を多く残した小鷹狩に比べ，薄田は明治・大正・昭和を生き，その時代を記録した点が特徴である。

薄田は昭和3年に広島放送局が開局した際，初代アナウンサーに就き定年まで勤めた人物である。本名のほかにも流石三郎などのペンネームで，スポーツ・芸能評論・郷土史の執筆を行った²⁷⁾。昭和42年に病没しているが，この薄田が戦前における広島市の大衆文化を記録した業績が『がんす横丁』『続がんす横丁』『続々がんす横丁』『がんす夜話』という一連の著作である。

これらを便宜上がんすシリーズと呼称するが，このがんすシリーズは，薄田の没後から6年が経過した昭和48年，薄田の連載原稿を長男純一郎がまとめて出版したものになる。この原稿は，昭和24年から『夕刊ひろしま』に連載されたもので，のち広島の地元新聞紙『中国新聞』に移り昭和36年まで続けられた。連載は「夢の盛り場」を嚆矢とする「がんす横丁一部」「同2部」「同3部」「同4部」「がんす夜話1部」「同2部」の7部で構成され，そこに展開される失われた風景に対し大きな反響があったという。

この連載のきっかけを作った吉田文五が『がんす横丁』を「明治大正から昭和十年代へかけての，広島の庶民生活の変遷史であり，世相史であり，風俗史である。それは旧市内の町名を単位としてえがかれてもいるので，古い広島の復元でもある」²⁸⁾と評価するように，原爆で失われた広島の姿が記録されている点は見逃し難い。そうした事実を吉田は以下の様に述べる。「薄田さんは，全滅して瓦礫の原となった広島の盛り場の思い出を，自分の青春の回想のなかに再現し，まるで，死んだ恋人の面影をえがくように，限りない愛情と愛惜と愛撫でもって，えがいていた。それは，につめににつめられていて，虹のような，また真珠のような，そんな光彩を放っていた。それが，うけたのだと思う。まして，古い広島は全滅し，新しい広島の未来は海のものとも山のものとも，見とおしのつかない時代であった」²⁹⁾なお薄田が本格的にこの作業にとりかかったのは，NHK広島を定年退職した後だったが，杖なくては歩けないほど足を痛めていたという。そんな状況下，古い広島人を訪ね歩き丹念に書きとめたのは，吉田の指摘する「限りない愛情と愛惜と愛撫」に基づくものであったと考えられ，がんすシリーズの各所に確認できる読者からの投書・指摘を紹介した箇所はその証左といえよう。

また，これも没後の出版ではあるが，薄田には宮島・広島の歌舞伎年代記の研究をまとめ

た『宮島歌舞伎年代記』（国書刊行会，昭和50）という著述がある。これは大衆芸能への強い関心をまとめたもので，薄田の大きな特徴である。県立広島商業学校（現：県立広島商業高校）で学生野球の応援団長として名を馳せ，その後素人劇団「広島十一人座」の同人となったという経歴，何よりがんすシリーズで紙幅を割かれる芸能関係の記述が，その見識を雄弁に語っていることを確認しておきたい。

以下，この薄田によって記録された広島の姿を確認し，再評価にあたっての意義を指摘する。なお薄田の記録には芸能関係のものが多く収録されているが，本稿冒頭に示した通り年中行事・祭祀祭礼関係の事例に焦点を絞り稿を進める。

6 薄田太郎の記述——慈仙寺のネハンの図の開帳・御供船・高提灯について——

現在，広島市中心部，いわゆる旧市内における社寺の賑わいというと，初夏のとうかさ（圓隆寺），住吉さん（住吉神社），年末のえべっさん（胡子神社）等を挙げることができよう。現在，これらは広島の三大祭りと呼称され，その開催期間中は交通規制が実施されることもあり，多くの人に認知されるものとなっている。しかし薄田によって記録された広島の姿は，それにとどまらぬ豊かな風景が描き出されていることに注意を払わねばならない。しかし事例が多岐にわたるため，ここでは薄田が紹介する，広島の古い姿を記録した，ある書物における失われた風景の中から代表的なものに焦点を絞りその記述に迫ってみたい。その代表的なものが「慈仙寺のネハンの図の開帳」「御供船」「高提灯」である。

慈仙寺とは広島市中区江波二本松にある寺院だが，昔からこの場所にあるのではなく原爆により中島本町から移転し，現在に至っている。中島本町とは現在の平和記念公園のある爆心地にあった町であり，太田川が平和公園の北端で本川と元安川に分かれるあたりを「慈仙



中島慈仙寺 旧2月15日涅槃會參詣群略景 淨土宗西山派
 『広島諸商仕入買物案内記』に見る明治前期の広島』（広島市郷土資料館，平成28）P89

寺の鼻」と呼ぶのは、この寺院あつての呼称である。なお、もともと広島県高田郡吉田町にあったが、慶長年間、広島城下へ移転した由緒ある寺院である。

薄田のいう「慈仙寺のネハンの図の開帳」とは、この慈仙寺の持つ「おねはんさんの図」が毎年陰暦2月15・16日の2日間、境内で公開されていたことを指す³⁰⁾。ネハンとは涅槃、すなわち釈迦入滅のことを指すわけだが、薄田によるとこの「おねはんさんの図」は、文化年間に描かれた縦3間(5.5m)、横2間(3.6m)という巨大なものだったという³¹⁾。小さい頃から毎年開帳に足を運び、開帳が多くの参詣者で賑わっていたこと、陰暦5月16日の新川場町戒善寺で公開される「六道一念の図」と共に忘れられないものだったことを回顧しているが、両者とも原爆で焼失し現存していない。

なおこの慈仙寺には、全国的に麻疹が流行した宝永4年に予防法を伝えた名医尼子道竹、詩人として知られた武井淡山、県知事千田貞暁と共に山中女学校を創設した山中正雄、天才飛行士といわれた山縣豊太郎といった広島で活躍した人々の墓地があったことも記憶しておくべきことであろう³²⁾。

次に挙げる御供船だが、これは小鷹狩の項で取り上げたものと同一の存在である。それを前提に薄田の記録を見ていくと、この御供船という名称は物理的な船体のみを指すのではなく、管弦祭にあわせ広島市で行われる祭礼全体をも指していることがわかる。これを踏まえ「京橋川の御供船」という一文を確認し、祭礼の概略を掴みたい。それが「宮島の管弦祭に関連して、広島市の御供船風景は、決して忘れることのできない豪華な行事であった。御供船を『おともんぶね』と読む広島最大の祭りは、東部では京橋川、西部では本川がその水上舞台にされていた」³³⁾である。



六月十六夜広島本川口の圖

『日本名所圖會全集 藝州嚴島図絵 上巻』(名著普及会, 昭和50) P426~427



広島橋本町浜嚴島神社

『広島諸商仕入買物案内記』に見る明治前期の広島
(広島市郷土資料館, 平成28) P68

区)の京橋川土手に鎮座する嚴島神社そばの明神浜を指す。薄田によるとこの場所で玉取祭が行われたそうだが、第4項で指摘したように、かつてそうした祭礼が行われ、御供船を見るため多くの人で賑わった風景を想起するには困難が伴うのが現状である。

なおこうした風景を懐かしむのは薄田や原といった文化人だけではない。かつてNHK広島放送局が原爆で破壊される前の広島を残そうと様々な取り組みを行い、その一環として絵を募集したことがある。その一部をまとめたNHK広島編『わがなつかしの広島』(広島地域社会研究センター, 昭和55)には林治子による明神浜を描いた絵と説明文が収録されている。林は当時を以下の様に回顧する。「宮島さんのお供船。夏が来ると思いだします。広島になつかしいお祭りの1つです。住吉神社, 嚴島神社へとお供していく豪華な豪華な飾り船でした。明治末から大正, 昭和16年太平洋戦争が始まる頃まで続いていたと記憶しています」³⁵⁾ 昭和46年に作成された『広島市の文化財 第1集 民俗資料 かき・のり 民俗信仰』(広島市教育委員会 昭和56)では、その来歴と衰退してゆくさまが記述されているが、それを見る限り、今や全くといってよいほど省みられていないと言わざるを得ない。

そして最後の高提灯だが、薄田は別の箇所でも「高どうろう」³⁶⁾とも表現しているが、文脈から判ずるに同じ存在を指すと考えられる。では高提灯とはどういった物で、どういった時に使用するのか。その一例が前段で挙げた御供船である。御供船が浮かべられる日には、京橋川にかかる橋の欄干に町名入りの大提灯が立てられ、また民家では屋根よりも高く宮島さんへの「おあかり」といわれる提灯が揚げられたという。この提灯が「高どうろう」と呼ばれており、家々はそれぞれ定紋の入った弓張提灯を屋根の上に立てた竹から釣り下げているようである。家によっては一本の竹を横にして、十数個の弓張提灯をつるすこともあったようで、幻想的な風景を想像するに難くない。薄田はこうしたことに関連し、戦前の広島市民

この御供船に関しては薄田以外の人物も多々言及している。例えば詩人原多民喜は『中国新聞』(昭和25年12月7日)に「広島」の牧歌」を寄稿した。そこには「昔、管絃祭の夜には京橋の明神の浜に、おとぼん船がやって来た。橋の上にはぞろぞろと人がひしめきあって、船の上で行なわれる十二神祇を見ている。かがり火が水に映り、衣装の金糸銀糸が火に照らされて、それを見ていると子供の私には、これはまるで夢幻のような世界であった」³⁴⁾とあるわけだが、原のいう明神の浜とは、橋本町(広島市中

の家々には、各家に1つか2つは定紋入りの弓張提灯を持っており、旧家になると入口正面の壁には、提灯を収納する白い紙箱が並べられていたことを回顧し「原爆後のヒロシマにみられないアクセサリ」³⁷⁾と評しているが、戦後生まれの者にとってはまさに未知の光景である。

以上、薄田が広島ของ古い姿を記録したある書物を紹介する際、失われた風景の実例として挙げた「慈仙寺のネハンの図の開帳」「御供船」「高提灯」について内容を確認してきたが、ここで「ある書物」についても触れておきたい。それが『広島諸商仕入買物案内記並に名所心ら遍』(明治16)という大福帳型の和本で、刊行当時の広島ของ風景をかなり正確に描写していると評価される本である。昭和42年に広島市の南海堂が復刻し、現在では『広島諸商仕入買物案内記』に見る明治前期の広島』(広島市郷土資料館 平成28)でその画像を確認できる。本稿は薄田に焦点を絞り稿を進めるため詳細は省くが、がんすシリーズでも、小鷹狩の本と共に度々引用・紹介される文献であり、原爆で破壊される前の広島を、視覚的に理解することのできる史料であることを指摘しておきたい。

7 薄田太郎の記述Ⅱ——近代における御供船について——

前項では「慈仙寺のネハンの図の開帳」「御供船」「高提灯」という3点を確認したが、後者2つが管絃祭に関連するため、本項と次項は、その点に注目して掘り下げることにする。

まず御供船は本川と京橋川を舞台とする行事である。前項では京橋川の事例を挙げたため、本項は残る本川の御供船についても触れておきたい。

本川の事例が、がんすシリーズで触れられる一例が、明治43年、広島最後の御供船³⁸⁾についてである。市内中心部を流れる本川の川沿いに、西本川との俗称をもつ西地方町(現在の広島市中区土橋町・河原町地域)という町があったわけだが、その町について語る際、御供船に言及されているのである。薄田によると明治43年は浅野長政公300年祭の年で、この年に出た2隻の御供船が広島最後のものとなったという。しかし京橋川の御供船は昭和初期まで続いているため、この表現は本川のみ、または伝統的な御供船による厳島渡航が途絶した…というような、限定的表現を含むであろうことには注意を払うべきであろう。

その他に本川の事例が登場するのは、御供船を飾ったとも飾りが、昭和15~16年頃にアメリカ人に買い取られ博物館に保存されているというものである³⁹⁾。とも飾りは御供船に関与する町がそれぞれ所有していたようで、例えば十日市町は渡辺綱、金札、羅生門のとも飾りを所有していたというが、ここで渡米したと紹介されたものは中島本町のものだという。

なお本川の御供船だが、前項で挙げた原や林のような回顧譚を確認することが困難な状況である。これは薄田が指摘するように、明治43年を機に本川の御供船が姿を消し、大正から

昭和にかけて、その姿を確認できなかった事情によると思われる。

ここで京橋川の御供船に話を戻し、『がんす横丁』に記録されている様子を以下に示す。

明神浜、京橋川の中央には、京橋町、橋本町とそれぞれの町名を染め抜いた幟を立てて二そこの御供船が浮いている。船首には黒帯のさがりが、水にすれすれの美しい形をみせて、船の両側には水色の垂れ幕が、そのまま水の上に浮いて、船の中心部には破風づくりのやぐらが建てられ、その周囲には宮島さんの定紋や染め抜いたちょうちんがつり下げられていた。船の四すみには、金糸銀糸でつづられた昇龍、降り龍の幟が立てられ、色とりどりの大きな吹き流しがあたりをはらっていた。とくにこどもたちの目をばちくりさせたのは、たたみ二畳敷もある船のとも飾りで、牛若丸と弁慶の五条橋が、金糸銀糸で縫いとられ、弁慶の七つ道具、牛若の狩衣などが輝くばかりの押絵で飾られていた。そしてこの押絵が、あかあかとかがり火に照らされた光景が忘れられない⁴⁰⁾

前項で挙げた『わがなつかしの広島』（NHK 広島編 昭和55）所収の林治子による絵にも弁慶らしき人物が描かれており、薄田の記憶と一致していることが分かる。上記のような装飾品は、町内毎に準備・保存され大切にされてきたが、戦争激化に伴う御供船中止と共に、以前の様な形でその姿を人前に見せることはなくなったという。

では戦後、このとも飾りはどうなったか。薄田は昭和29年の夏、京橋町の御供船に飾られていたとも飾りを見学している。経緯は不明だが原爆で焼失することなく戦後も保存され、見学したときはちょうど虫干しの最中だったらしい⁴¹⁾。薄田によると8畳の部屋いっばいに広げられたとも飾りは、五条橋の弁慶の箇所だけとはいえ、まさに幼少期に見たそのものだったという。弁慶の持つ銀メッキの長刀には宮島管絃祭の御供をした名残の塩サビが残っていたというから、薄田の勘違いでない限り、京橋町の御供船は京橋川を遊覧するだけでなく、河口を下り広島湾に出て宮島へ渡ったという理解となろう。なおこの長刀には「明治三十四年七月京橋町由良久登作」との銘があり、とも飾りには安政4年に大阪の三井で作成したものを明治42年6月に新調したことが墨で書かれているとあることから、その来歴を繙く興味深い記録といえよう。

ちなみに京橋川の御供船だが『わがなつかしの広島』（NHK 広島編 昭和55）の林治子による絵以外にも『広島諸商仕入買物案内記並に名所心ら遍』に「広島橋本町巖島神社」の絵が存在する。それらを確認すると、飾りつけられた御供船の周りに、小さな船が描かれていることが分かる。ここから御供船を観覧するための船もあったと考えられるが、『がんす横丁』は、その中に囃子船が存在していたこと、そしてその囃子船がどういう経緯で生まれたのかを語っている。

薄田によるとこの囃子船が登場したのは明治42・43年頃だという⁴²⁾。平塚土手下に住んでいた河田兵衛という篠笛の師匠が、弟子や愛好者を集め御供船に加わろうとしたことが嚙矢らしく、屋形船をちょうちんや造花で飾り、船のへさきに賀葉多連の扁額を掲げ囃子船としたようである。この囃子船だ人が人気を博し、のちには住吉祭にも姿を見せたことが記されている。

8 薄田太郎の記述Ⅲ——火振り行事・巖島大明神等について——

前項で御供船に触れたため、本項はそれ以外の管絃祭関係の事例を押さえ、失われた広島
の理解を進めていきたい。

小鷹狩の項で挙げた白島の火振りは江戸時代のものだったが、薄田はこれに続く明治の火
振り行事の姿を記録している。御供船と同じく巖島神社の管絃祭に関わるものなので、その
推移等を確認しておきたい。広島では管絃祭を「おかげんさん」と呼び、その祭日である旧
暦6月17日に各所で祭礼が行われるわけだが、火振り行事が、巖島神社を遥かに尊んで行わ
れるものであることは先述したとおりで、特段変わった点はない。「蓬莱三宝清め給へ」と声
をあげながら、500～600人、時には1,000人以上の男児や大人が松明をもち…というのも小鷹
狩の時代と変わりがないようだが、変化したものとして提灯の高さを挙げられる。自身の子
供の頃には、町内を飾る提灯の高さが低くなっていたことを指摘しており、『自慢白島年中行
事』では最大5丈、すなわち約15メートルの竹、丸太を継ぎ合せていたものが、明治末期頃
には2～3丈の竹ざおに弓張提灯を掲げたものになっていたという⁴³⁾。そして提灯には蠟燭
のほか、その頃流行したガラス蠟燭（カンテラ）を入れたものもあり、はるか巖島神社への
「おあかり」としたとあり、景観の推移をうかがうことができる。

小鷹狩はこの日に、汐を汲み家に撒いたり、引用したりする習俗のあることを記している
が、薄田もまたそうした習俗を記している。それが白島の火振り行事の日、すなわち管絃祭
にあわせ高提灯を挙げる日、満潮になる時間、はるか宮島の方に向かって拍手を打つという
ものだ⁴⁴⁾。これは何故かという、ちょうどその頃が、巖島神社の管絃船が地御前に渡った
後、還御する時刻にあたるからである。薄田によるとこの行事は旧藩時代から長く続けられ、
市内を流れる7つの川、そしてあちこちの町では明治・大正の頃まで見る事ができたとい
う。

管絃祭関係の事例を拾うのであれば、誓願寺境内の巖島大明神についても触れる必要があ
る。『藝州巖島図絵』の巻5に管絃祭当日の誓願寺の様子が描かれているが、そこには多くの
人で賑わう境内と、亀の泳ぐ池の側に鎮座する巖島大明神の姿を確認することができる。こ
の『藝州巖島図絵』は天保13年（1842）のものだが、薄田によるとこの絵の風景は、原爆前



紫雲山誓願寺

『日本名所圖會全集 藝州嚴島図絵 上巻』(名著普及会, 昭和50) P436~437

の姿そのままであったという⁴⁵⁾。

そもそも誓願寺は天正年間、恵空が京都の誓願寺にあった天智天皇の宸筆「誓願寺」の扁額を授かり、広島へ捧持し開山したと伝えられる寺院である。湿地帯であったこの場所を整え、寺を開いたわけだが、その際、紫の雲に包まれた光景を目にしたことから紫雲山という山号を思いついたとの伝承もある。そうした恵空が慶長10年(1605)に勧請したと言われるのが、嚴島大明神である。社のつくりは3間半(6.3 m)四方となっており、金比羅社と隣接していることがわかる。また薄田によると高さ8尺(2.4 m)の鳥居、石畳に囲まれた池に浮くたくさんの亀、池の上に架けられた石橋のことを、誓願寺の本堂や鐘楼と共に回顧している⁴⁶⁾。

またこの誓願寺で記憶に残ったものとして記されているのが「白あんどん」である。多くの出店が出たが、川柳の文句をあしらった戯画が描かれ、ろうそうくの灯りで照らされる戯画——ハスの葉をかざした蛙が笑ったもの、ヒゲだるまの生態など——が印象的だったようだが、これもまた原爆で失われた風景の一つといえよう⁴⁷⁾。

9 おわりに

平成28年に長編アニメーション映画「この世界の片隅に」が上映され話題となったことは記憶に新しい。物語の内容もさることながら、劇中において描かれる戦前の広島の姿、それも生活の姿が克明に描き出されたことは、この作品の特徴の一つといえよう。これを受け平

成29年8月6日、すなわち原爆投下の日に『朝日新聞』は「さすが見た広島、街は今 爆心地『ここに生活があった』」との記事を掲載した。そこに紹介された旧中島本町の住民浜井徳三の話を挙げる。

ここの人はみんなうち（旧中島本町にあった理髪店）で髪切りよったみたいだね。『あなたの父さんによくバリカンで頭たたかれよった』ゆうて言われますよ。映画は10回ほどみましたが、みるたびに楽しいことを思い出します。うちの店が映画に出とるけん、両親やきょうだいが出てきて、街がよみがえっとるんでね。私はアニメとは思っていないです。世界中の人たちがみてくれて、本当にうれしい。裏道に出たらザクロの木があったとか、裏の奥さんがべっぴんさんだったとか楽しいことばかり。やっぱり人間て勝手なもんで、原爆で両親、兄姉を亡くしたけど、苦しいことは過ぎたら終わりなんよね。年取って思うのは、世界中からここ平和記念公園に人々が来られるのはありがたいけど、両親きょうだいの頭を踏みにじられるような気もね、するんです。ここには生活があったわけですからね⁴⁸⁾

この「ここには生活があった」との表現は、現代広島の郷土学習に携わる者にとって痛切な問いかけともいえるのではなからうか。なぜならば現在の郷土教育は原爆の惨禍の伝承に注力するあまり、その惨禍で失われたものを引き継ぐ、甦らせるという観点があまりに希薄と言わざるを得ない現状があるからである。無論、その指摘を否定する向きもあろうが、本稿の挙げた諸事例を振り返り、いったいどれほどそうした生活や文化の風景が重んじられてきたかを検討する必要があると考える。

ではどうすればよいのか。一つの提言として、失われたものを引き継ぎ、伝えていくことに焦点を絞り、展望・ビジョンを打ち立てることが必要と思われる。原爆で失われた命を甦らせることは誰にもできることではない。そして失われた風景を取り戻すことも容易ではない。しかし広島人が大切にしてきたもの、それも戦後失われたものに目を向け、それに命を吹き込むことは可能である。原爆を経験した世代が世を去り、いかに原爆の惨禍を語り継いでいくか？という点が議論されているが、それは広島の実生活や文化を伝えていくという総論の上で語られるべきことであり、原爆の惨禍のみを語り継ぐという観点のみに焦点を絞ってはいは、郷土教育としては不十分ではなからうか。いわゆる平和教育を包括する総論としての広島学的視点の提唱である薄田が『がんす夜話』で原爆の悲しみを語った箇所がある。

さて原爆後、白島での寺院の変遷は広島百メートル道路あたりの移動した寺と同様に激しい。東寺町も西寺町（寺町）も、その変容は近代化とはいいながら激しいものがあ

る。寺院の境内は狭くなり、墓地もその範囲が縮小された。それは原爆によって長年続いた広島の多くの旧家が全滅し、そのため墓が無縁のものとなり、檀家の滅亡で寺の生活もいろいろと変わった。本堂と墓地がはなればなれになった寺院の形も、しょせんは原爆のなせるわざで、この祖先への追想や感懐は、原爆のムザンさを知らない外国人には、広島人や長崎人の気持ちがわからないであろう。ましてや「世界のヒロシマ」などと観光的気分で見られるには、広島はあまりにもあわれである⁴⁹⁾。

小鷹狩や薄田の成果に注目するのは、学術的な意義もさることながら、そこに郷土教育を考える上での重要な視点がつまっているからである。広島における郷土教育は、先人の大切にした生活や文化を懐かしみ大切にするというアクションの先に、原爆の悲劇、戦後の悲しみという複雑な感情で織りなされているフィールドを回避して進むことはできない。そうした際、何を語りどこに重点を置くかという問題はあるものの、先人の大切にした生活や文化の記憶を疎かにしては、バランスの良い郷土教育は成り立つまい。例えば上掲した薄田のいう悲劇も、広島の生活と文化の姿を知るか否かで理解の深さが異なってくるのではないか。そして悲劇を乗り越え、未来へ進んでいく方向性は、かつての広島の生活や文化を踏まえた「地に足のついたもの」でなくてはならないのではなからうか。

冒頭で紹介した子規の句碑が残る比治山だが、生活文化という観点から見ても重要な場所である。比治山は広島県広島市南区に位置する標高 70 m ほどの山で、現在も広島市内有数の花見の名所として名を馳せているが、これは御便殿や陸軍墓地の存在と切り離せない歴史がある。現在、広島市まんが図書館や広島市現代美術館の建つ位置のそばに広場が存在するが、そこにはかつて御便殿という建物が存在した。日清戦争時、大本営が広島城に移された際、休憩所として設けられたのが御便殿であり、その任を終えた後、比治山に移築されたのが御便殿である。それ以来、この御便殿のある広場は明治天皇ゆかりの場所であると共に、桜の名所ということで広島市民にとって憩いの場所となったものの原爆で倒壊し再建されることはなかった。また樹木で言うならば、現在の NHK 広島放送局前の白神社側にあった国泰寺境内の御廟様の桜、白神社の側にそびえた大楠、海雲寺の極楽実見の霊樹、など広島のシンボルといわれた柳とあわせても広島を回顧するものは枚挙に暇がないといってよい。広島で生活していると「広島は原爆で何もなくなってしまった」とのフレーズをしばしば耳にする。物理的に消滅してしまったものが多いことは事実だが、書物に残っていたり、静かに語りつがれるなど、まだその記憶は完全に消滅してはいないのである。広島で戦前の地図復刻を手掛ける石踊一則の元に問い合わせが寄せられることも、その一証左ではあろう⁵⁰⁾。

ここから導き出される提言は、今こそかつての広島の日常の生活に思いを馳せることに力を注ぐべき、ではないか？というものである。広島県には原爆ドームと厳島神社という二つ

の世界遺産が存在する。そして広島への観光客は、この2施設を中心に観光することが多い訳だが、観光客を迎える肝心の広島人が、世界遺産以外の郷土の生活や文化をも改めて自覚する必要があるのではなかろうか。文化施設として広島城を加えたとしても、あとは「原爆でなくなってしまった」という言説を言い訳にして、郷土の生活や文化に目をそむけていないだろうか。原爆で破壊されてしまったことは事実であり、その惨状からの復興が困難であり文化的なものを振り返る余裕がなかったという側面もまた事実だが、原爆投下から70年を経た平成29年において広島郷土教育を考える際、原爆投下を含めた長いタイムスケールで広島郷土教育を考える必要性を指摘せざるをえない。小鷹狩や薄田の業績を再評価すべき所以がそこにあると考える。

【注】

- 1) 松山市立子規記念博物館『季語別子規俳句集』子規記念博物館，昭和59
- 2) 薄田太郎著 薄田純一郎編『がんす横丁』たくみ出版，昭和48，P145
- 3) 前掲注2 P150
- 4) 小鷹狩元凱『広島雑多集』大正9，P27（小鷹狩元凱『元凱十著』弘洲雨屋，昭和5）
- 5) 前掲注4 P25
- 6) 前掲注4 P21
- 7) 小鷹狩丙吉『小鷹狩元凱翁』（京屋印刷所，昭和13）
- 8) 前掲注7 叙
- 9) 前掲注7 叙
- 10) 藝備協会については『元凱十著』に収録されている小鷹狩の著作『芸備協会略志』に詳しい。また『小鷹狩元凱翁』では村井二郎吉らの回顧にその経緯が記されている。
- 11) 『小鷹狩元凱翁』に収録される高田整三「懐しき小鷹狩先生」、長尾恒吉「小鷹狩氏と津野田連隊長の補任」等に詳しい。
- 12) 『小鷹狩元凱翁』における村田俊彦「思ひ出の多き小鷹狩さん」に詳しい
- 13) 前掲注4 P6
- 14) 前掲注4 P6
- 15) 前掲注4 P7
- 16) 前掲注4 P7
- 17) 前掲注4 P1～2。これ以下、本項における正月行事にまつわる引用はこの箇所とする。
- 18) 前掲注4 P21
- 19) 前掲注4 P22
- 20) 小鷹狩元凱『自慢白鳥年中行事』（明治44稿了，初度印刷昭和3）P1
- 21) 前掲注20 P20～21
- 22) 『広島市の文化財 第1集 民俗資料 かき・のり・民俗信仰』広島市教育委員会，昭和56，P84～85
- 23) 前掲注20 P22
- 24) 前掲注20 P21
- 25) 前掲注20 P22
- 26) 前掲注20 P22
- 27) 前掲注2 卷末の著者略歴より
- 28) 前掲注2 吉田文吾「なつかしい広島の本」
- 29) 前掲注2 吉田文吾「なつかしい広島の本」
- 30) 薄田太郎著 薄田純一郎編『続がんす横丁』たくみ出版，昭和48，P156～157

- 31) 前掲注30 P156
- 32) 前掲注30 P160
- 33) 前掲注 2 P160
- 34) 原 民喜の記事は前掲注 2 の P160 にも掲載されている。
- 35) NHK 広島編『わがなつかしの広島』広島地域社会研究センター, 昭和55, P59
- 36) 前掲注 2 P163
- 37) 前掲注 2 P164
- 38) 薄田太郎著 薄田純一郎編『続々がんす横丁』たくみ出版, 昭和48, P19
- 39) 前掲注40の P19のほか, 前掲注 2 の P163にも記載されている。
- 40) 前掲注 2 P161
- 41) 前掲注 2 P162
- 42) 前掲注 2 P164
- 43) 薄田太郎著 薄田純一郎編『がんす夜話』たくみ出版, 昭和48, P150
- 44) 前掲注43 P150
- 45) 前掲注30 P196
- 46) 前掲注30 P196
- 47) 前掲注43 P151
- 48) 現在は <http://www.asahi.com/articles/ASK7F66FCK7FPITB01T.html> でも閲覧可能。
- 49) 前掲注43 P132
- 50) 石踊については拙稿「離島——大崎上島——の歴史伝承における課題と克服 ——石踊一則の文化事業を事例に——」(『広島商船高等専門学校紀要』39, 平成29) に詳しい。

Summary

Attention and revaluation to Motoyoshi Kotakari and Taro Susukida

—A proposal for local education in modern Hiroshima
through an approach to lost Hiroshima—

Goichi Nakamichi

This paper aimed at giving an evaluation focusing on the achievements of Motoyoshi Kotakari and Taro Susukida. Why do they need their assessment? It is because it has a work that conveys the memory of the life and culture of the former Hiroshima City which was lost by the atomic bomb.

Hiroshima is a city with a history of about 10 thousand lives lost due to the atomic bomb dropped on August 6, 1945. Explosive flames have erased not only human life but also the cityscape and culture that flourished with Hiroshima Castle in an instant. After that, Hiroshima got the reconstruction and developed as the largest city in the Chugoku district as of Heisei 29, but Hiroshima's life and culture memories lost in the atomic bomb are about to disappear.

The appearance of Hiroshima with many Yanagi written by Shiki Masaoka was lost, For example, it is extremely rare for the past crowds to be told in Hiroshima today, such as the festival of Takeuchima Shrine in the present Peace Memorial Park and the fact that many people gathered at the festival of Inari shrine in Hiroshima Castle.

Why was memory of such living and culture lost? How can we utilize such memories? Is local education in Hiroshima as it is now? These analyzes and recommendations are future tasks and prospects. However, in light of such circumstances, this paper focused on clarifying the records of Hiroshima's life and culture left by Kotakari and Susukida. Since the range of consideration is wide, we have taken priority on cases concerning annual events and festivals.